団員レポート

副団長 橘　和彦

財団法人 福島県体育協会事務局長／
うつくしま広域スポーツセンター事務局長

希望と不安を背負い、いざ日本体育協会へ。最終打ち合わせ、結団式、壮行会。そして、成田空港に移動して宿泊。翌日、前日とは打って変わっての晴天。団員15名、最高の旅立ちだ。日本時間午後22時５分到着。乗り換えて、デュッセルドルフへ移動。現地時間17時30分（日本時間午前１時半）睡魔が襲う。現地時間21時30分（日本時間午前５時半)、最高に眠いが、やっと一日が終了し、いよいよ明日から研修だ……（爆睡)。

研修は、３つの課題を持って望んだ。一つは、住民が自分の生活の中にスポーツをどう位置づけているか。二つ目は、行政はスポーツ振興にどう携わっているか。三つ目として、学力向上策の中で、学校教育とスポーツ振興の連携はどうなっているかの三点にした。

● ドイツのスポーツクラブ事情

一般の人の自由な余暇時間は、日本と同様に散歩やスポーツ、旅行、文化芸術活動、娯楽など多様に行われている。一方、青少年は学校教育活動の一環である運動部活動が無く、午前中、もしくは午後１時には放課になる。そのため、青少年のスポーツ活動は、地域スポーツクラブが受け皿になって中高齢者に至るまで、週１、２回程度、地域スポーツクラブでスポーツを実践しており、国民の７割が不定期ながらもスポーツに参加し、３割が週１、２回程度、地域スポーツクラブでスポーツを実践していると言われているようだ。地域スポーツクラブ会員は、家族で町のクラブに出かけて、子どもたちはサッカーや体操等をする。親たちは他のスポーツをする。祖父母はそれを見守っている。そして、帰りにクラブハウスでおしゃべりをしたり、ビールを飲んだりして帰る。ドイツ人にとって生活の中にスポーツがあり、町にはその場がクラブという形で存在し、週末をクラブで楽しむことは、単なる日常生活の延長であり生活そのもののようだ。いわゆる地域のスポーツクラブは、気の合うスポーツ仲間との出会いの場、自分自身のスポーツの場、自己実現の場として存在しており、私の町内会の親和会のような家族的なものだと感じた。

● 行政の役割

ドイツでは、ほとんどの人々が生活の中でいろいろな目的（健康・体力向上・楽しみ・ストレス解消・フィットネス等）でスポーツ・運動を行っている。そして、その地域スポーツクラブは、自由意志で運営するのが原理・原則であり、行政から独立して市民のボランティアから成り立っている。しかし、当初、スポーツ愛好者で運営していたクラブも、目的、ニーズが変化し、フィットネス、楽しみ、健康を目的とするなど多様化している。原因は、社会一般に高齢化、健康の重視、個人主義化などである。それらに伴って、クラブ運営するための行政的課題（会員の維持・新会員の勧誘・指導者の確保・財政手段の獲得・将来性の計画と保証・ニーズに合ったプログラム等）が表面化してきた。これらの課題に対して、ドイツでは、地域におけるスポーツ政策の戦略と方法に対する新たな挑戦を展開していくことになったようであるが、スポーツも前記したような課題解決のために行政を必要としており、行政もスポーツを通した青少年の健全育成や人づくり、地域づくり等としてスポーツを必要としている。そんな中、

日本と同様に、行政と行政の発展にとって、スポーツと運動はどのような意味があるのか。スポーツが急激に、しかも構造的に変化していく時代の中で、地域のスポーツ施策に何が期待されているか。この答えが明確になり方向性が確立されれば、日本での地域スポーツクラブも、なお一層推進され活性化されるだろうと思った。

ドイツでは、構造的変化の問題について、競技能力の分化（競技スポーツ）健康の分化（健康・フィットネススポーツ）楽しみ享受の分化（楽しみを求めるスポーツ・余暇スポーツ）明示的な自己経験を求める能力の分化（体験・冒険・スリルスポーツ）など、スポーツの体験とスポーツの機会が多様化されてきており、その対応策を踏まえて、全住民にスポーツが開放されることが望ましいので、そのために、ネットワークにおける協力パートナーの構築が大切という結論に達したようである。日本においても、行政が率先して、日本の文化や地域に適したネットワークづくりを進めることが最重要であると感じた。

● 学校教育とスポーツの連携

ドイツの学校教育は、「ゆとりある指導」を謳って進んできたが、2002年にOECD（経済協力開発機構）が公表した学習到達度調査で約30カ国の15歳を対象にした調査の結果、ドイツは読解力21位（日本：８位）、数学と科学は20位（日本：数学１位・科学２位）と先進国で最下位だった。これを受けてドイツでは、教育改革の動きが進んでいるようだ。同時に、国の学校スポーツ委員会は、青少年の運動嫌い傾向（運動不足）や肥満問題に対応するために研究プロジェクトを立ち上げた。結果、学校におけるスポーツは、生涯スポーツへの動機づけに重要な役割を果たすことから、まずスポーツ授業の条件、意義、質ならびに授業以外のスポーツ実施状況を把握する必要があると考えた。これらの報告に基づき、ドイツスポーツ連盟とスポーツユーゲント（スポーツ少年団）は、州文部省と連携を図り、民間の立場から学校スポーツの問題に取り組みを開始した。特に、学校放課後に学校で授業以外のスポーツを楽しむ機会を増やす取り組みにおいては、地域スポーツクラブとの提携を強化し、積極的に展開していく方向に至った。まさに、スポーツクラブの「TSVバイヤードルマーゲン」は、学校とスポーツクラブの連携システムを構築しているところであった。中でも、「半日制寄宿舎事業」における教育プログラム（一般的な宿題指導・個人補習授業・試験準備授業）やスポーツプログラム（タレント発掘・育成・強化の特別トレーニング）、そして、運営上の活動として、送迎サービス、スポーツ特別食の提供、キャリア相談、学校・クラブ・家庭間の調整などは、まさに学校教育とスポーツとが連携したシステムであり、システムに感動するとともに、「TSVバイヤードルマーゲン」を拠点として州・市町村をはじめ、関係機関のネットワークが構築されていることはすばらしいことであると思った。

● 日本の「総合型地域スポーツクラブ」の定着にむけて

日本は、ドイツと同様に推進はできないが、日本式のネットワークを構築して、総合型地域スポーツクラブを促進することは重要である。今後、ネットワークの協力体制のパートナーとして、国、都道府県、市町村及び教育関係、スポ少や中・高体連、学校、企業、商業施設などの協力・融合を図ることやネットワーク等をマネジメントするマネジャーを育成すること、そして、地域住民の目線にたった構造的に構築されたネットワークづくりが重要だと思う。そのために、今後、どういう支援や環境づくりが必要か、視察したことを基に福島県独自の対応策を考えていきたい。

（参考文献等：海外研修資料・著：佐藤由夫「ドイツ国民のスポーツ参加動向」）

団　員　平山　康夫

㈶福島県体育協会うつくしま広域スポーツセンター
プロジェクトマネジャー

はじめに
～総合型地域スポーツクラブとの出会い～

「総合型地域スポーツクラブ」という聞き慣れないことばを耳にしてから６年が経ち、現在、福島県うつくしま広域スポーツセンタープロジェクトマネジャーとしての立場と、総合型クラブを運営するクラブマネジャーの立場で、常に理想（夢）と現実、そして疑問の中で、クラブ支援そしてクラブ運営に携わってきた。「ドイツが総合型クラブの先進国」ということを文字や写真という情報からしか得ることができないまま、「スポーツとは何か。総合型地域スポーツクラブができることは何か。ドイツの スポーツ文化と日本のスポーツ文化の違いは何か」という疑問を抱きながら、2009年クラブマネジメント指導者海外研修（ドイツ研修）に参加した。

ドイツでは、見るもの、聞くものすべてが新鮮に感じ、まるで子どもが新しいことに出会ったような感覚を覚えた。「総合型地域スポーツクラブ」とは何か。ドイツのスポーツ文化は何か。といった研修当初の疑問を、ドイツでクラブに携わっている地域の人々が和らげてくれたように感じた。

ドイツから帰国後、多くのクラブ関係者から「ドイツ研修はどうだったか？」という問い合わせや質問が多く寄せられ、それぞれにドイツ研修を振り返って話をしていく中で感じたことは、「スポーツクラブに対するモチベーションが確実に高まった」ことであった。今後も、このモチベーションを保ちながらクラブ支援、クラブ運営に取り組んでいきたいと考える。

スポーツ文化とは
～生活の中にスポーツの定着を～

ドイツのそれぞれの地域における課題は、少子高齢化、子どもの育成、未就学児の運動不足による健康阻害、運動不足による疾病の増加、地域教育力の低下、地域コミュニティの希薄化などがあり、運動不足による疾病や健康・食事が重要視され、我々の住む地域の課題と同じである。つまり、どこの国でも地域でも同じ課題を持ち、その課題解決のためにスポーツは大きな役割を担っている。また、スポーツを文化としてとらえるならば、「スポーツは、コミュニケーション（仲間）であり、教育（成長）である。そして医療（元気）であり、芸術（感動）である」と考えることができる。そのため、地域の生活の中にスポーツ文化として定着させることが、それぞれの課題解決に近づくことであり、スポーツクラブの発展がその課題解決の役割を担うことができると考える。

我がスポーツクラブは何を
～クラブ運営のための自主努力とは、そして我がクラブも画期的な変化を～

ドイツ研修での新たなる発見は、ドイツのクラブは「市民が自分たちでクラブをつくり、自分たちのために活動し、自分たちの活動を成立させるために国家から助成を獲得する」という基本的原則からクラブ活動を運営しているということである。つまり、クラブは自分たちのために必要なものであるならば、そのクラブを運営するために自分たちが努力するということである。日本の各地域で活動しているクラブは、まだ受動的なクラブ

運営が行われているケースが多いといわれている。地域のため、自分たちのためにクラブ運営ができるようになれば、「ボランティア精神」という概念が定着してくると考えられる。

2009年クラブマネジメント指導者海外研修（ドイツ研修）に参加して、クラブを運営している立場から感じたことは、「もう一度ドイツの地を踏み、100年以上の歴史から創り上げられたドイツのスポーツ文化を学びたい」という思いを抱くようになり、それと同時に次の世代を担う子どもたちにドイツのスポーツ文化を学ばせたいという新たな目標を持つことができたことである。多くのクラブ関係者と接していく中で、クラブに対する思いや情熱、自信を持ってクラブ運営に取り組んでいる姿勢は、大いに学ぶべきことであり、また次の子どもの世代に引き継いでいかなければならないことである。ドイツをはじめヨーロッパのスポーツ文化であるスポーツクラブを真似るのではなく、日本のスポーツ文化は何か、地域のスポーツ文化は何か、を考えたクラブ運営が重要であると考える。これからのスポーツクラブは、地域のスポーツ文化の拠点となり、どんな機能を持ったクラブを目指しているのかを明確にして、クラブが独自性を持った取り組みをすることにより、地域にとってなくてはならないクラブになることが重要であると考える。

行政は何を
～広域スポーツセンターの役割とは～

ライン・ノイス郡庁舎を訪問し、フォルカー・リットナー教授やアクセル・ベッカー氏の講義を聴く中で、ライン・ノイス郡庁舎内に、スポーツ担当部署、公共の健康課、健康担当部署、社会的問題を担当する部署、ライン・ノイス郡スポーツ連盟が配置され、地域住民の健康づくりのためにそれぞれが課題を共有し、課題解決に向けて取り組んでいる。このことは、スポーツを媒体として様々な機関が連携し、問題に取り組む政策やネットワークを構築し、組織が連携して問題や課題に取り組む体制になっていることは、大いに学ぶべきことであるように感じた。

これからの行政としての広域スポーツセンターは、クラブ経営の専門職として、またクラブと行政の中間機関として、クラブ支援のみならず地域のスポーツ文化の問題や課題に対するシステムづくりを行うことができる組織になっていかなければならない。そのためには、行政と総合型クラブがよりよい関係を築き、その連携により総合型クラブが自立そして発展し、総合型クラブよるクラブマネジャー等の雇用が獲得され、総合型クラブが社会的に認められることが、行政としての広域スポーツセンターの役割であるように考える。

最後に ～感謝～

2009年クラブマネジメント指導者海外研修（ドイツ研修）に参加し、総合型地域スポーツクラブの将来について、「地域の夢」を真剣に話し合うことができる14名の仲間ができたことに感謝したい。また、クラブマネジメント指導者海外研修が、これからの日本の将来を担う人材育成に大きく貢献することを期待し、また、総合型地域スポーツクラブをとおして、地域の子どもが育成され、夢のある地域づくりができることを願って、2009年クラブマネジメント指導者海外研修のレポートとしたい。

団　員　高倉　好博

福島県湯川村　ゆがわMYまいクラブ
クラブマネジャー・事務局長

それはある事業をおこなった時からが始まりでした。

ある事業とはかねてから自分がやりたかった日独スポーツ少年団同時交流事業です。それが念願かなって平成18年に我が湯川村で受け入れ決定になり嬉しさもひとしおでした。

当日は心弾む思いで団長他８名の団員を迎え入れました。私も１人の団員をホームスティさせ１週間という短い期間ではありましたが終始行動を共にすることができ、全員との交流の場はもちろん家に帰っても夜の更けるのも忘れるほどいろんな話を団員から聞いたりパンフレットを見せてもらったりとドイツの情報を得ることができ、いつしか機会があればドイツへ行ってみたいという気持ちになっていました。

その後総合型地域スポーツクラブとの出会い、「おもしろそうだな」「やってみる価値があるかな」そう思いクラブマネジャー、アシスタントマネジャーの資格を取得しこの事業に取り組むようになりました。

そんなときに飛び込んできたのがクラブマネジメント指導者海外研修事業です。

４年越しの思いがこの事業に参加しようという気持ちにさせられたことは言うまでもありません。参加決定通知が来たときの嬉しさは「やったー…!!」の一言でした。ドイツへ行ったらドイツを丸ごと見てみやろう、そう思いながら刻を過ごす毎日でした。まだまだ先のことと思っていたドイツ連邦共和国へのクラブマネジメント指導者海外研修視察、この日になってしまいました。

胸はずむ思いで飛行機に乗り込む。自分なりに考えている研修テーマをもって出発です。

私達のスポーツクラブは、地域みんなで「いつでも・どこでも・いつまでも」を合い言葉にスポーツを通して楽しいコミュニケーションの場を作ることと個々の能力に合わせたスポーツを生涯楽しむことができるような環境づくりを目指しています。設立以来150名前後のクラブ員が８つの種目の中でスポーツを楽しんでいます。けれど、これから先どうしてもマンネリ化と種目の設定やら会員が集まらない…。というところに突きあたる。ゆくゆくはトップアスリートが出るくらいまでなってくれればと思っている。それをどうすれば克服できるか、私なりに考えているテーマである。

長い飛行時間もそんなに苦にならず無事目的地に到着である。樹木も色づき初めた街並みがやさしく我々を迎え入れてくれた。先進と言われるスポーツシステムのドイツへ第一歩を踏み入れたことになる。

さあ、ドイツでの研修の始まりである。いろいろと用意された講義は結構ハードな研修内容だったと思うが全員が緊張感を持続し真剣そのもので集中し聞き入っていたと思う。施設を見学しそこのクラブ員の生き生きした表情に驚きと感動の連続でした。何か見るもの聞くものがすべてが新鮮でなりません。私にとってはまさに夢の国、あの時スポーツ少年団の団員らと話したそのものであり、毎日が素晴らしい体験の連続でした。田園風景と街並みと森と広い道路と人々の暮らしが何かゆったりと流れている、そんな感じがまた感動的でした。

そんな中でスポーツを愛し楽しんでいる姿はま

さにドイツそのものではないかと。

あるクラブでは桁違いの大きさにビックリさせられ、これがクラブそのものと肌で感じることも出来て良かったと実感したところです。

初日から景色、空気、食べ物と、すぐにこの地になぜか馴染んでいる自分がいることに気づき自分ながら驚きました。生活環境は日本とは比べにならないほど何か時間がゆったりと過ぎてゆくそんな気がしてなりませんでした。

短い滞在期間の中でこれだけ感じ取れたこと、「もう少し長くいれたら」と心の中でつぶやいた次第です。

クラブの視察ではどのクラブに行っても熱烈な歓迎を受け、ただただクラブ員の皆さんには感謝の気持ちでいっぱいです。また、クラブを見ながらそれぞれに感じ取れたことは、一つは企業を取り入れてのクラブの育成学校とクラブとの連携による育成などクラブハウスの常設で常にクラブ員がコミュニケーションが取れていること、クラブハウスの必要性など、多くの青少年を取り入れることの必要性など、いろんなことを知ることができました。まだまだ足りないものばかりでどれから手を付けていいのかわからないくらいです。しかし、少しずつでも見たり聞いたりしたことが役に立てられるよう努力していきたいと思います。いつしか、あの時見た風景が自分たちのクラブのスポーツ環境になっていたら最高です。

無事我が国に帰ってきてそれぞれに仕事をしていることと思いますがいろんなことが脳裏に浮かび、「また行ってみたいなドイツ」なんて考えている自分がここにいます。

今回、全国各地からの団員とそれぞれに規模は違っても同じ志をもって研修に参加し行動を共にできたことも喜びであり各県に仲間ができたことは大きな収穫の一つでもあります。まずはこの出会いに感謝です。

また、この研修で全面的にサポートしていただいた通訳の方や現地のスタッフの皆さんにも感謝をしたいと思います。

最後にこれからもスポーツクラブがより良く地域住民のために生かされ還元できるよう頑張っていきたいと思います。

団　員　諏訪　賢一

茨城県坂東市　スポーツクラブさしま
理事長・クラブマネジャー

総合型クラブの創設に関わり７年目を向かえ、現在は、クラブ育成アドバイザーとして、多くの事例を積み重ねながら地域のスポーツ活動を支援しています。ドイツのクラブ訪問では、クラブが住民の身近に存在している状況と、地域住民によるスポーツクラブ運営の実態と、住民のスポーツ活動への憧憬を探ってみたいと思った。ドイツでは、単一種目の小規模なクラブから、数千人の会員を持ち多数のプログラムを展開しているスポーツクラブまで、法人格を持って運営されているという。運営の仕組みはボランティアの協力互助活動が基本で、日本のクラブ運営と大きな差はないと思われるが、ドイツのスポーツクラブ が100年を超える時間の経過でドイツ国民や地域に大きな影響を与え、またクラブが継続できた原点を知ることも今回のドイツ訪問の課題であった。

国民のライフスタイルの中に幼少期からスポーツ活動が地域に取り込まれている。日本でも幼児から教育としてスポーツ活動があるが、ドイツの学校体育と学校の体育施設は日本には及ばないし、部活動というシステムはないので低年齢層からスポーツクラブへの加入状況は高い。スポーツクラブでの活動は「参加の自由」が原則であり、クラブに登録していても参加を強制されることはないし、自分のペースでやりたいときに好きなスポーツに参加すればいい。強くなりたい子供たちは、自分から練習を志願して指導をうければいいし、自主的にスポーツのスキルをあげていくことが出来る。このような自由なスポーツとのふれあいは、スポーツを文化として成立できる大きな要素であろう。スポーツの導入から地域に活動の拠点があり地域との関わり合いの中でスポーツが存在することで、スポーツを文化として認識することができるのでしょう。そして、能動的にスポーツ生活を人生の楽しみとして捉えているものと感じました。夕方の時間の合間に、ドイツのショッピングセンターを覗いてみました。食品売り場は

豊富な商品に多くの買い物客があふれている風景は、日本と同様に夕食を楽しむ家庭が想像されたが、食材の肉や魚、野菜類の販売ロットが大きく、小さなパックの食材と簡単に食べられる調理済の惣菜類がいかにも少ない。なぜだろう…？　すぐに答えが返ってきた。家庭の食事は家族で調理するのがドイツの家庭の役割なのであり、「小さな食材と、すぐに食べられるパックは余計なお世話」なのだと。便利性を求めることよりも、大切なものを失うことの意味を知らされたが、これがドイツの合理性といわれる考え方のひとつであろうか。ならば、国民のもつ意識の中に「スポーツライフの楽しさ」を大切にしたい。その中から得られる答えに、スポーツクラブの存在が求められているのを感じた。

スポーツクラブ訪問では、「コルシェンブロイヒシニア世代スポーツクラブ」を訪問した。理事長の言葉で、「クラブ活動を通じて会員の交流と親睦が深まり、人と人との絆が繋がっていくのが一番嬉しい事です」との話は、スポーツ本来の活動のみを求めるのではなく、「スポーツ活動を通じた人々のコミュニケーションの広がりの楽しみ」に、スポーツクラブの役わりを理念として求めていました。

日本も、かつては繋がりをもつ地域社会によって成り立っていたし、住民の交流が生まれることで様々な地域の課題を解決していた時代があった。小生も毎日生活に追われた家庭では、小学・中学と両親が学校に来ることが無く、余裕のない

時代であったが、唯一運動会だけは必ず観に来てくれた。お弁当を食べながら、運動会の話で父の顔もほころんでいたし、いつも怒られていた近所のお爺さんも笑顔で言葉をかけてくれた。現在の日本の核家族を中心とした地域社会が人と人との交流を阻害しているとは思わないが、スポーツは地域の繋がりから広がる可能性をいつの時代も持っているし、人間が生きるための大きな要素に「運動」があるように、スポーツ文化は大きな力となっていることを再認識した。

では、日本バージョンの総合型地域スポーツクラブとは…？　地域に根付くための原点は…？クラブマネジメントなどドイツのクラブから学べるものは何だろうか。

日本では、スポーツ少年団・学校部活動・高校体育、と教育の一環としてスポーツ活動が進められてきた。これらはドイツにはない日本型の学校体育を中心とした活動であり、それなりにスポーツの基盤を作り上げてきたことは日本らしさのいいところかも知れない。このような形態に、地域性を加味したスポーツの楽しさが味わえる仕組として、総合型クラブを想定しているが、子ども達が始めてスポーツに関わり、向き合う仕組みとしては心細い思いがする。ドイツのゴールデンプランのような地域に開放された行政の施策が必要でしょう。たとえば、学校の体育館を学校の敷地に建てるのではなく、学校の近くの地域に設置して地域の活力を育てる事も、子どもと地域が一体化したスポーツ文化が育つ原点になるでしょう。もともと運動が大好きな子どもたちが、成人し老後を過ごすまでスポーツに関われる機会を得るためには、国レベルの具体的な方向性は早急に求められていると思う。

政権交代の事業仕分けで、「総合型地域スポーツクラブ」の必要性が理解されなかったことは、スポーツを一部の趣味とアスリートの世界に捉えられていることも今後の課題でしょう。スポーツ界全体がスポーツから広がる可能性と、広く国民に必要とされるスポーツの姿をプロモートし、具体的な姿でビジョンを国民に示されなかったことが大きな要因と思いました。

アクセル・ベッカー氏の講義では、ドイツ国民のボランティア活動に関わる人たちの60％が、スポーツ活動に拠点をおいているという。この状況は、スポーツ活動が広く国民生活に重要な要素となっている証であり、ボランティアの活動がクラブを支え、そのボランティア活動をする人たちを地域が理解して信頼する構図があり、行政がそれらを支援する仕組みは、スポーツを、市民文化として継続するための社会システムなのです。日本の総合型地域スポーツクラブも理想としているが、まだまだ時間がかかりそうだ。

日本らしさの総合型クラブを考える上でもっとも必要と思うのは、スポーツから広がる社会のグランドデザインを、国も、地域も、スポーツ関係組織も、同じ理念の中でビジョンを掲げられる一貫した組織と施策が必要と思いました。それはスポーツの世界だけではなく、多くの社会組織と協働できる考えで、まさにすべての垣根を取り払った活動の認識が必要でしょう。近年急速に伸びてきているオーストラリアのスポーツの原点は、地域で子ども達が、積極的にスポーツに関わりあえる環境をつくり、自主的にスポーツの楽しさをしっかりと学ばせることに軸足を置いています。それが、国民全体のスポーツ文化意識の向上に繋がっているといわれています。

日本の総合型クラブが抱える様々な課題の解決には、ドイツの研修を持ってあらためて振り返ることが出来ました、そして日本らしい「総合型地域スポーツクラブ」の姿を求めるには、スポーツ関係者だけの議論だけでなく、地域の国民のスポーツ文化を国民のみんなが話し合える環境と組織が早急に求められるでしょう。

「もっと、もっとスポーツを大切にしたい」ドイツ研修でした。

団　員　亀野　陽太郎

千葉県佐倉市　NPO法人 ニッポンランナーズ クラブマネジャー

クラブを設立した８年前、海外のクラブ事情について様々な資料を通じ知識を得たものの、歴史や、制度の異なる海外のクラブ運営の手法を、まだ何もない状態で理想として描くことに対し、あまりにも遠い存在であるのと感じ、当時は少し違和感を持って見ていた。しかしクラブ設立から８年が経過、地域の中でクラブの存在や役割が、少しずつ見えてきた中で、様々なクラブの運営形態を知りたいと思い始めた時に、今回のドイツ研修のチャンスは巡って来たのである。参加に際し「ドイツ国民の３人に１人が、クラブに所属している」という現状を自分の目で見て、肌で感じることを自身のテーマとし、団員14名と共にドイツへ向かった。

デュッセルドルフ空港からバスで滞在地、グレーベンブロイヒへ。翌日からの研修を前に、ドイツの文化に触れるべく現地でのコーディネートを担当して頂けるアクセル・ベッカー氏（郡スポーツ相談課）と共に皆で夕食に出かけた。お店にて早速「３人に１人がクラブに所属している」という事に対し、確認をしたいと考え、通訳の方を通じ、男性店員にあなたはクラブに所属していますか？と聞いてみたところ、答は「いいえ」。“忙しいから”というのが理由であった。「皿を持って階段を昇り降りするのが僕にとってのスポーツだ」と笑った。次に女性店員に同じ質問をしたところ、「いいえ」。いよいよ３人目。とても体格の良い女性店員が来た。通訳の方の助言もあり、あえて聞かない事にした。早くも研修を前に、「３人に１人」は私の中では崩れた……。しかし研修を通じ、もっと大切な事を知る事となるのである。

翌日からの研修は、クラブに関する歴史から、少子化、子どものスポーツ離れ、社会全体のグローバル化といったドイツが抱える様々な問題をベッカー氏より伺うことからスタート。生活の多様化が急速に進み、深刻な問題として捉えられている事を知る。前日のレストラン店員のように、人々のスポーツへの関わり方も変化しており、クラブの在り方も大きく変わろうとしている。クラブが生き残って行くために『時代の変化と共に、クラブが常に変化してゆくことが必要である』という言葉が心に響いた。また郡の“管轄下”である市のスポーツ課長よりスポーツ振興施策について話を伺った際、郡、市、両者の行政担当者が共通の認識の元、スポーツ振興は行われていることを実感すると同時に、日本との制度的な違いにより全てが当てはまる事ではなかったが、何よりもクラブの必要性について、同じ温度で語っていた姿が印象に残った。

実際に訪問したクラブでは、それぞれのクラブ運営に関わる『クラブマネージャーの方々』からお話を伺った。それぞれが得意分野の知識を生かし、自身のクラブの運営に携わっている。日本で描いていたイメージは、安定した基盤のもと、悠々自適にクラブライフを楽しんでいる彼らの姿であったが、そこには自分達が受け継いだクラブを、次世代に残こすべく様々な取り組みを行うマネージャー達の姿があった。殆どのクラブマネージャーがボランティアとして関わっているのにも関わらず、実施内容は医療機関と連携をはかり、心臓疾患を持つ方々を対象としたもの等、とても専門性の高い領域のプログラムの提供も行っていると

いう現状に驚かされた。ベッカー氏の抱く危機感は、クラブ側にも確実に伝わっており、各クラブが時代と共に変化しながら特色ある運営を目指していることに大きな衝撃を受けた。

実際に視察を行ったのは、シニア世代のクラブ。多世代のサッカークラブを柱としたクラブ。体操クラブを柱に、サッカー、陸上のクラブ。製薬会社“Bayer”がサポートする世界トップレベルのフェンシング、陸上、ハンドボールチーム等を所有しているクラブの４か所。歴史は80～100年以上、会員数500名～5,000名とドイツでも大規模なクラブ。それぞれ施設を所有しており、見るもの全てが“羨ましい”と感じた。しかし話を聞くにつれ、クラブ自身の努力によって徐々に整ってきたものであることを知る。企業がサポートするクラブでさえ、初めは単なる街のクラブ同士の合併がきっかけだったのだ。もっと規模を大きくしたいと考えた際に、企業にも明確なメリットを示したうえで、協力を依頼したのだと云う。『やりたいことが、もっと楽しめるように』その単純な要望に対し、クラブとして努力する。必要とあらば企業・行政にも明確なメリットを提示しながら協力を募る。その繰り返しが、今の姿なのだ。もちろん現在でも行政、企業との連携を図りながら、自分のクラブに誇りを持って、次の世代にクラブを渡す努力を続けているのである。またクラブという存在は、ドイツ人にとって、単にスポーツを楽しむだけの場ではなく、地域の中での課題解決を行うなど、日本のクラブとは担う役割の広さが全く異なり、日本の自治会組織に役割が似ていることに、訪れたクラブで歓待を受けながら気付かされた。今後日本の中に、本当の意味でクラブが根付くためは、スポーツの場を提供するだけでなく、地域の抱える様々な課題解決に積極的に取り組むことにより、出来るだけ多くの人にとって『なくてはならないもの』としての存在に成り得るかに掛っていると思う。

今回の研修を通じ、ドイツでさえクラブ運営に関し、大きな時代の変革期に来ており、新たな運営方法を常に模索している事を知った。日本でも独自のクラブ運営方法の必要性を強く感じる。「日本からの研修団体を多く迎え入れている。しかしそこで持ち帰った情報が、日本でどのように活かされているのかが、伝わって来ないことが残念である」と。最後に訪問したクラブ、バイヤードルマーゲン・クラブマネージャーのアクセル・ヴェルツ氏の言葉が私の心に強く残った。もちろん今回の研修では、時間的な限界や、言葉の壁もあり、ドイツのクラブのほんの一場面を見たにすぎない。しかし今回の研修を通じ、日本各地でそれぞれが特色あるクラブを目指し、懸命にクラブを運営している方々と同じ時間を過ごした。今後も定期的な情報交換を行いながら、共にスポーツが根付いて行く仕掛け作りを続けてゆきたいと思う。研修を通じ、すぐに取り入れる事の出来ない事ももちろんある。しかしそれ以上にすぐに出来ることも多くあったことも忘れてはならない。

講義、視察以外でとても印象に残った事が１つある。「ケーゲル」というスポーツだ。ドイツ式のボーリングで、穴のない大きさの異なるボールを使って、９本のピンを倒すゲーム。単に数多く倒すだけのルールだけではなく、多様なルールが存在するのだ。それは実に良く考えられているルールであった。ケーゲルを楽しみながら、与えられたルールのもとに勝ち負けを競うのではなく、“あるもの”を使って、アイデアを出し合い、もっと面白くなるように考える。クラブの進むべき道も、そこにあるような気がした。行政や企業に頼るだけでなく、まずは自身のクラブが努力を重ねてゆくこと。ドイツのクラブの運営の手法に、ダブって見えた。“スポーツは人から与えられるものでなく、自主的に取り組むもの”スポーツの原点を改めて感じた体験であった。

団　員　市川　裕代

新潟県新発田市　NPO法人 新発田市総合型地域スポーツクラブ「とらい夢」
アシスタントマネジャー

この海外研修の自己課題は、当クラブにおいての重点課題事業である取り組み、「総合型クラブと学校との連携」について主にドイツの現状やシステムを学ぶことにあった。

● 総合型クラブと学校の連携

ドイツのスポーツ振興政策の中で、総合型クラブは社会的に大変重要な役割を担っている。

視察に訪れた「TSVバイヤードルマーゲン」は、会員5,000人以上の大規模クラブで、TSVスポーツ施設には様々な競技施設が集まっている。このクラブは、製薬会社のBayerと連携しており、総合型クラブの理想の形とも思えるような充実した施設と、多様なプログラムを実施している。また、学校とも様々な連携を行い、「子どもの体力向上・タレント発掘事業」にも積極的に取り組んでおり、子どもスポーツコンセプトという目標を設定し、競技スポーツのタレント養成や運動経験の少ない子ども達を取り込む運動プログラムなどを充実した内容で行っている。

現在のドイツでは半日制の学校が主流とのことであるが、クラブは学校と連携し、スポーツに力点を置いた全日制の学校を支援している。このプログラムには、昼食、勉強の手伝い、スポーツ、余暇活動や、競技能力を持った子どもたちのキャリアを学校教育の面でサポートするためのもの等があり、若いスポーツ選手が確実に学校を卒業できるよう、学習面やメンタル面での支援も行っている。周辺地域３つの学校から子ども達が集まり、スタッフ45名が担当している。

このクラブでは、将来の挑戦として種目・学校・クラブの違いを超えた「学校と競技スポーツの連携システム」の構築を目指し、システム作りを行っている。また、社会的活動として、町と協力して「清掃の日」などを実施し、地域社会に貢献する役割も担っている。

その他、視察に訪れたドルマーゲンの私立学校

「ノルベルト・ギムナジウム」には、スポーツクラスがあり、16歳から特別な種目のトレーニングが受けられる。また、スポーツと学業の両立ができるよう補習を行うなどのサポートを先生たちが行い、学校生活の両面から関わっている。

この学校で「クラブと学校との連携」について、クラブの指導者（運営者）と学校の先生がどのように連携しているのか質問したところ、ここでは、スポーツ技術の向上のために指導者を学校に派遣するなど、学校とクラブが以前から自然な形で連携しているとのことである。

学校からの回答は以上のようなことであったが、その後のアクセル・ベッカー氏の最終講義ディスカッションの中で、クラブと学校との連携においては、すべてうまく行っているのではなく、様々な問題が多いことや、95％はクラブがイニシアティブをとって呼びかけていること、そして、学校がクラブに対して理解を示しているとスムーズであるが、そうでない場合は連携が難しいこと、クラブとの連携がいかに意味のあることかと言う事を示す「コンセプト」を作った上で連携を行うことがとても重要であるとのお話があった。

このような状況は日本も同じであり、今後、学校との連携の中でより良い形を作っていくには、学校や地域の理解を得られるような、クラブのさ

らなる運営努力と行動力が必要であると感じた。

● 海外研修を通じて感じたこと

この研修において、ドイツのスポーツ振興政策やクラブ作りに直に触れることにより得たものは、ドイツのスポーツ振興政策の中でのクラブの役割や、運営における様々なマネジメントのありかたを見聞きできたこと、(同じ形のクラブは２つとない) そして、個々のクラブの運営努力を実際に垣間見ることができたことである。

クラブ運営には、行政、学校、企業、スポーツ振興団体、地域住民などが様々な形でかかわり、一つのクラブを支援していることが実感として感じられた。こういった一貫した取り組みが、ドイツスポーツ振興の一つの柱となっている。

その中でクラブは、そこに関わる人たちの様々な努力と協力により、地域スポーツに貢献できるプログラムや事業の提供を行って、「存在意義」を見出している。そしてなによりも大切なのは、運営に直接関わる人たちが自分たちの役割を明確に理解し、自分のクラブに誇りをもって運営に取り組んでいることが大きな原動力となっていることである。

● 総合型クラブの将来展望

ドイツと日本では「総合型クラブ」を取り巻く状況に多くの違いはあるが、人や組織などの繋がりや連携の重要性を理解し、「クラブの価値を見出す」という意識を持つことによって、より発展したクラブ運営を目指すところは共通しているのではないかと考える。

このような研修成果を踏まえ、自分達のクラブがどのようなクラブへと発展することが望ましいのかという将来のビジョンを具体的に考え、プランを立て、実行することができる「組織づくり」や「人材育成」が必要であると考える。

今後、当クラブの運営においては、行政･学校･地域などと連携し、子どもの体力低下などにより学校が課題とする体育活動の充実と、運動部活動の実施が困難な状況をサポートする体制ができるような取り組みを行いたい。また、スポーツ面だけでなく、文化的なことや、社会性を身につけさせることも将来的には考えていかなければならないと感じた。

そして、さらには、障がいを持つ子どもがスポーツに親しめるような教室など、あらゆる子ども達の体力向上を図ることを目的としたスポーツ事業等の開催と、進む高齢化社会における高齢者をはじめ、様々な年代において生涯スポーツの実践ができ、地域社会に根付いた事業開催や地域交流のできるイベント開催の実施など、新発田市独自の特色を持った総合型地域スポーツクラブへと発展できるよう、このドイツ研修での経験を充分に生かすことのできる運営マネジメントを目指し、努力して行きたい。

この海外研修に全国各地のクラブから参加した、クラブ運営に携わる方々とドイツの協力者の方々との出会いと交流が、今後ネットワークとなってクラブを繋ぐ大きな力になってゆくことこそが、クラブ運営の発展にとってもっとも意義のあることだと感じ、このたびの研修の大きな収穫であった。

団　員　三田　博司

愛知県豊田市　NPO法人 朝日丘スポーツクラブ
副理事長・クラブマネジャー

先進国ドイツのスポーツクラブに学ぼうと、ワクワク、ドキドキしながら研修に臨んだ。

研修ではケルンスポーツ大学のリットナー教授、ライン・ノイス郡スポーツ相談課のベッカー氏から、ドイツにおけるスポーツクラブの歴史と現状や課題などを聞き、さらに現地のスポーツクラブを訪問させていただき様々な話を聞くことができた。

ドイツのスポーツクラブが発展できたのは、1960年にゴールデンプランが発表され、運動不足の解消と心身の障害を改善しようと運動施設の建設に取り組んだことから始まり、現在、国民の３人に１人がスポーツクラブに所属し活動している。1950年代のクラブ数は9,800クラブあったが、ゴールデンプラン発表から現在まで90,000を超えるクラブがあり、50年間で急激に増加した。

ドイツでは、人々が生活する中にスポーツがしっかり位置づけられており「忙しくてもスポーツをする時間を確保しながら生活を楽しんでいる。」と聞いた。日本ではスポーツを競技としてとらえているが、ドイツでは「競技だけでなく生活を楽しむための一部である。」という。日本とドイツのライフスタイルの違いをすごく感じた言葉であった。

スポーツクラブは住民の自由な意志に基づき設立され、ボランティアの力で運営されてきた。１～２種目で会員が30名程度の小規模クラブから、10種目以上1,000人を超える会員で150年以上の歴史を持つ大規模クラブまで様々である。どのクラブも会費は安価で、大多数がボランティアによるクラブ運営を行う役員とボランティアによる地域の指導者がいた。

スポーツクラブは土地や体育館などの運動施設を市から無償で借り受け活動しており、年代に応じたプログラムを会員に提供している。スポーツだけのプログラムではなく、旅行やフェスティバルなど様々なイベントが提供されている。また地域の小中学校と連携をとり、子ども達の運動能力

の向上や病院や医師、保険会社が協力し、心臓病の方に対して専門医と連携をとりながらプログラムを提供し「健康」を取り戻そうとしているクラブもある。まさにクラブの活動が生活の一部であり、地域住民がみんなで支え合っている姿であった。

近年の社会の変化、特に高齢化が進む中での健康ブームが起こり、スポーツへの関心が高まっている。「健康」をキーワードにスポーツクラブが変化しなければならない時が来ている。このような状況の中でフィットネスなどを行う商業スポーツが台頭してきており、従来からのスポーツクラブに競争原理が欠けていることが問題となってきている。ボランティアで長年運営できたこともあり、クラブ経営するという考え方が欠けているようで、運営においてもボランティアでの役員を引き受ける人が減っているなど課題も増えてきている。また若年層のクラブ離れも起こっているなど、ドイツにおいても課題が出てきているそうだ。

以上のような状況を踏まえ各クラブを訪問した。

スポーツクラブを訪問した第一印象は、みなさん「笑顔」で活動（運営）しており、クラブライフを楽しんでいるなと感じた。訪問してまず初めに目に付いたことは、談話室に必ずカウンターとサーバー（ビールを注ぐ）が設置されていて、ク

ラブ員が集う場となっており楽しむ場であった。日本では見られない光景であった。これが社交の場となりクラブライフを楽しむ場である。役員の中には、私はビールを飲んでこのクラブのために貢献しているといっている役員がいた。飲んだ売り上げの一部が業者から還元される仕組みになっているということであった。これもクラブを支える一つの手段である。

日本でスポーツというと、どちらかというと競技スポーツをイメージするが、ドイツではスポーツを生活の中に取り入れ楽しむという習慣が出来上がっていて、誰もが笑顔で楽しく暮らすこと、それがスポーツであり競技をすることが目的ではなく、楽しむことが目的のようだ。スポーツクラブは地域で暮らす人々の健康維持やスポーツの楽しさを伝える場であり、その運営はボランティア意識が高い人たちにより支えられ「おらがクラブ」だ、100年以上続いていると自負し、本当に楽しんでいるといった様子を見ることができた。

60歳以上で組織しているシニアクラブを訪問した時、クラブの役員はクラブを運営するため役割分担をして進めているということであった。理事長はクラブの将来を見据え、副理事長は財務、他の理事は事業企画担当、HP作成担当など責任を持って運営されていた。なんと役員は皆ボランティアで報酬は受け取っていないという。何がそうさせているのか。年金暮らしの高齢者がスポーツクラブを通じて助け合って楽しく生きている。そんな光景であった。

会員1,000人を超える大規模なスポーツクラブでは、企業が施設整備や管理をバックアップしたり、州からある種目に対して強化指定を受けたりして、ドイツでもトップレベルの選手を輩出しているクラブもあった。運動施設は充実しておりプロの指導者も配置されていた。そして地域の小中学校との連携を図り、地域の子どもにスポーツを提供し、地域の中からトップレベルの選手を育成しようとしていた。オリンピックや世界選手権でメダルを獲得している選手が育っている。強化選手にはスポーツだけでなく勉強がおろそかにならないよう専門教師が付くというフォローの体制が整っているという。素晴らしい環境が整備されていた。

クラブマネジメントというと、事業の企画、会計事務、会員管理、広報活動、渉外などクラブ運営全般で様々な事柄を行うことではあるが、ドイツでは役員がその役割を分担しみんなでクラブ運営を楽しんでいた。あの笑顔がクラブの歴史と伝統を受け継いでいるように見えた。

今回の研修の最後に、ケルン市でサッカーのブンデスリーグの「1FCケルンVSハノーファー」の試合を見たとき、ホームのケルンの応援を見ていると、チームの成績がどうであれ熱狂的な応援を目の当たりにした。50,000人収容のスタジアムのほぼ全員が一つになって応援しているあの姿を見たとき、これこそ「おらがチーム」だ。自分たちのチームだと誇りを持って楽しんでいる。ドイツ人の我がクラブ（スポーツクラブ）に対する本心が見えたようであった。

クラブマネジメント指導者海外研修を終え、ドイツと日本のスポーツクラブを取り巻く環境の違いが見えてきた。この環境については今すぐ変えることは難しいだろうが、スポーツクラブ自身の活動が、市民生活に無くてはならないものになっていくような活動への変化は可能であると思う。スポーツクラブの活動に携わる者として微力ではあるが貢献できたらと思う。我がクラブの活動モットーは「明るく・楽しく・元気よく」であり、この事を地域の人々と共に実現できるよう、じっくり基盤をつくって行きたいと思う。

最後に、今回のクラブマネジメント指導者海外研修に参加させていただいた㈶日本体育協会始め関係機関の方々に感謝したいと思います。ありがとうございました。

団　員　岸田　美也子

岐阜県垂井町　たるいチャレンジクラブLet's クラブマネジャー

平成21年度がスタートして間もない５月。広域スポーツセンターより、日体協主催の海外研修派遣団の募集案内が届いた。研修先はドイツ。期間は約１週間。日程も何も確認することなく、まず「行きたい！」と思いすぐに広域スポーツセンターに連絡しました。

クラブ設立７年目。準備委員会から数えると８年目。その間、一貫してクラブ運営に関わってきた。設立から５年位はがむしゃらに事業をこなし、クラブ認知度を上げることにまい進し、平日も休日も、昼間も夜も常に携帯を離せない日々が続いていた。

我が家は核家族で、小中学生の子を持つ母であり主婦である私が、昼間ならいざ知らず、夜や休日も出かけていく。家に居るときでも携帯が鳴れば対応に追われ、家族には本当に申し訳なく思いながら続けてきた。そしてここ２年間。やっと自分の足元が見られるようになった。見えてきたものは不安と後悔の連続。「これが創りたかったクラブなのか･･･」「これがスポーツ振興なのか、まちの活性化につながるのか」クラブマネジャーとして今私がなすべきことは何か……自問自答を繰り返していたとき、この海外研修の募集案内が届いた。これだ!!　今一度初心に帰り、50年・100年と歴史を積み重ねてきたドイツのクラブを視察（勉強）することで、新たな展開が見えるのではないかと応募し、選ばれるかどうかもわからないのに勝手にスケジュールに組み込んでいました。

ある朝、事務局に広域スポーツセンターから電話があり、「岸田さん、ドイツ研修派遣団選ばれましたよ～」と告げられました。単純にうれしかったです。

そして９月に入り、事前研修会に赴き派遣団の皆さんにお会いした。研修内容もさることながら、全国から集まった皆さんはそれぞれ実績があり、研修に対しての熱い思いが感じられ私は恥ずかしかった。この日まで、私は半分観光気分だったからです。

サッカースタジアムにて

そして、応募した時の思いを確認し、皆さんの熱い思いも感じつつ成田に向いました。

ドイツに向う機内は長旅ではあったが、これから始まる未知の体験にワクワクしていました。皆さんも目がキラキラしていて、見るもの聞くものすべてを吸収するぞ！　という勢いが感じられました。機内でも到着後のスケジュールを確認したり、現地時間や天候の情報を得たりと気持ちは高ぶっていました。が、仲間内で日本語だけで話している間は結構リラックスしていて過ごせていました。

国際線から国内線に乗り継ぎ、デュッセルドルフに到着し、お世話になるベッカーさんと通訳の井手さんの出迎えをうけると一気に緊張感が高まりました。ここはドイツ！　いよいよ本格的研修が始まるのだという意気込みとはうらはらに、時差ぼけの影響で体が少々悲鳴をあげていました。

研修が始まると、見るもの聞くものすべてが「そうだ！　そうなのだ！」と自分の中でなんとなく描いていたクラブのイメージが次々と映像的にインプットされ、これがクラブと言うものなのだと、行く先々で確信に変わってきました。日本でやり始めたクラブという概念はドイツのクラブとは少々違いはあるけれども、昨日今日にできたクラ

ブとは違い、積み重ねてきた歴史が物語っていて、クラブが生活の一部として根付いているすばらしさを感じ取ることができました。クラブの存在が、市民の自発的参加やボランティア精神の浸透度によって大きな意味あるものとなっている点は、私たちは見習なければいけないし、これからの重要課題でもあると感じた。健康志向重視傾向は日本のクラブにおいても同様で、今後目指すべきものには大きな違いはないと感じました。

ただ、ドイツ国内でもこれがベストではなく、大なり小なりの課題を抱えているのも事実。見せていただいたクラブはすべてが成功しているクラブであって、問題を抱えているクラブもあると聞きました。私はすべてがベストでないことに少し安堵しました。むしろ、そういう問題を抱えているクラブからもお話を聞きたかったなとも思いました。

私の目指す方向性はあながち間違いではなかったみたいだが、少々焦りすぎているなと反省しました。設立から７年でようやくクラブと言うものが何なのか。という視点にやっと向き合えるようになってきた程度で、これから何十年先の目指すものを再確認し、少しずつ成長していけばいいのだと思いました。そのことに気づかせてくれたのが今回のドイツ研修でした。

百聞は一見にしかずというように、机上の勉強で得られないものが、今回見聞きすることで得られ、その上、今まで学んできたことをさらに肯定づける結果にもなった。

また、見聞きした内容だけでなく、ドイツの空が、風が、太陽が、わたしのガチガチに固まっていた不安や悩みをやさしく解きほぐしてくれた気がします。そして、この研修で知り合えた志高い派遣団の皆さんからもらったパワーも私のこれからの原動力となったことも研修の大きな成果の１つでした。

帰りの飛行機では、自分のクラブへ帰ってこの研修で得た成果をどのように発揮したらいいかを考えながら帰ってきました。すぐには成果を表すのは難しいですが、何十年後のクラブを見据えて少しずつ歩んで行きたいと思います。

ただ１つ残念なのはドイツという国の観光をしていないので、今度はプライベートで訪れたい国になりました。

この研修のチャンスを下さった日本体育協会さんにも感謝です。

団　員　菅井　繁實

和歌山県田辺市　NPO法人 会津スポーツクラブ
事務局長・クラブマネジャー

2007年生涯スポーツコンベンションが福島県で開催され、全体会でフォルカー・リットナー教授より「社会への発展に貢献するスポーツクラブ～社会への統合・健康・市民ボランティア・生活の質～」について基調講演がありました。午後の地域住民が主役となったスポーツ環境づくり分科会で「ドイツにおけるスポーツ振興プロジェクトの実践」と題する発表がアクセル・ベッカー氏よりありました。ケルン市の調査研究、ライン・ノイス郡の公益を担うパートナーとしての行政とスポーツクラブについて示唆に富んだ発表に大きな感動を受け、機会があれば是非ご教授いただけることを夢見ていましたので、今回のドイツ研修に参加できたことは望外の喜びでした。

私の主な研修テーマの一つ目は、ポスト工業化社会にあってスポーツが必要不可欠で、地域スポーツクラブが社会資本を生み出す中心的な力・可能性を持っている、というリットナー教授のテーゼである。社会資本とは通常道路や空港などのハード面のインフラ整備を指すのが通例であるが、教授が指摘している社会資本はソフト面としての「ソーシャル・キャピタル」であり、「スポーツ・キャピタル」を指していると理解することができた。ソーシャル・キャピタルとは、コミュニティを構成するメンバーの間の相互扶助、ネットワーク、それらの背後にある住民間の信頼関係が、コミュニティの運営を円滑に行うための「潤滑油」あるいは「触媒」として作用するという考えで、これをキャピタル（資本）に見立てた概念であり社会関係資本などと訳されている。

パットナムによると、ソーシャル・キャピタルが豊かであることの意義とは、市民や地域全体のつながりの重要性を示している。社会資本を測る指標として、地域組織や団体での活動の頻度、ボランティア活動、友人や知人とのつながり、社会への信頼度をあげている。ソーシャル・キャピタルが豊かな地域は、政治的コミットメントの拡大、

子どもの教育成果の向上や、近隣の治安の向上、地域経済の発展、地域住民の健康状態の向上など、経済面社会面において好ましい効果をもたらしていると指摘している。この概念は、地方分権型社会の形成を推進している多くの都道府県や市町村において、市民の自発的行政参加や市民団体と行政による協働のまちづくりを推進するための原動力となる地域力の、基礎をなす概念として注目されている。

リットナー教授の命題、ポスト工業社会の諸問題に関連して、スポーツとスポーツ組織が持っている統合の能力、福祉的能力に対する期待が今後組織的体系的に増大するであろうこと、これについては疑いの余地がない。この言葉が総合型スポーツクラブに携わる者にとって、大きな心の支えになると確信することができました。地域のスポーツの充足に留まらず、地域の生活課題や教育課題等の解決に自主的・自発的にかかわり、総合型地域クラブの育成・支援活動を通じて、地域コミュニティの発展に貢献したいと決意を新たにしているところです。さらに、地域政策あるいはスポーツ政策を考えていく場合には、諸問題に対するコンセプトを作っていかなければならない。そのために重要なのはネットワークを作っていくこと。スポーツが地域社会にあってスポーツの発展を活性化するために最も重要な対処となり、その

ネットワークの舵取りが必要で、舵取りには専門的な能力・専門性というものが前提となることも研修で学んだ重要なことである。

研修テーマの二つ目は、スポーツクラブと行政機関との関係である。私自身が現在、総合型クラブの事務局長（クラブマネジャー）として運営に携わっているなかで、行政とのパートナーシップをどう構築していくかが重要な課題である。事前研修で得たライン・ノイス郡の生涯スポーツ振興プロジェクト「４つのドアモデル」に大きな関心を持ち、新しいスポーツのあり方を考える上で参考にすべくまとめておきたい。以下４つのドア

①スポーツ課：スポーツ政策決定と実施に携わる重要な行政機関

主な業務：スポーツクラブに対する支援･援助、振興を図る

助成金：指導者に対する助成、会員に対する助成、オンライン化の助成

②市民スポーツ相談課（課長ベッカー氏）

研究・調査部門を担当、住民に対し相談・助言を行う機関（ケルン体育大学スポーツ社会学研究所分室）

第１のパートナー：クラブマネジャー(名誉職の役員)を対象とした研修会

第２のパートナー：健康福祉課や青少年課といった他部局との連携

第３のパートナー：住民への対応、いつ・どこで・どのような活動が行われているかといった情報提供

③スポーツ協会：スポーツクラブ（約400）の代表・とりまとめの役

ボランティア指導者の養成、指導者講習会等

④スポーツ財団：競技スポーツ振興

独自の基金を創設､ノイス郡に席のある選手等へ援助される基金

● ４つのドアのメリット

①実務的な長所：主要機関としてスポーツ文化局を持つことで、４つのドアのスタッフがお互いにアドバイスや援助をすることができる。

②一つの集約されたデータを共有しながら緊密な共同作業のもとに連携が取れる。

それぞれの専門家が緊密な関係を保ちながら、即座に対応ができ、すばやく正しい解決方法、処置がとれるといった良さを持っている。

③外側に向かってのつながり

市民スポーツ相談課→ケルン体育大学スポーツ社会学研究所

スポーツ協会→ドイツスポーツ連盟、各競技団体

スポーツ課→州や国の行政機関、青少年局、厚生省

● 助成・補助のあり方について

補完の原則：スポーツクラブが地域社会のために公共の活動、青少年の健全育成、中高齢者の健康増進等、本来自治体がやるべき仕事を補完しているという視点。

その視点に立って、行政はスポーツクラブを支援する。

● クラブのトップの役割で最も重要なこと

現状を分析し将来に向けての判断をすること＝クラブの存続に責任を持つ

最後に、このようなすばらしい視察研修の機会を与えていただいた日本体育協会、小倉団長はじめ情熱あふれる団員の皆様、きめ細かい配慮で快適な旅をさせていただいた総務の金谷氏に心から感謝申し上げます。

団　員　澤田　修次

広島県福山市　東部スポーツクラブ
ゼネラルマネジャー

「チャンス・チャレンジ・チェンジ」

我として、生涯スポーツ社会の実現の向けて、我が生活圏における日常的なスポーツ活動拠点となる総合型地域スポーツクラブが育成・発展していく為の課題は次の2点に集約される。

ひとつは(1)**人材や住民意識にあります**。中味（悩み・問題点）として

①競技志向と楽しさ志向の意識のずれ
②一部運営者の過重負担
③事務局を支える人材の確保
④運営者・指導者・世話役の育成と確保
⑤質の高いプログラムづくり
⑥既存スポーツ団体の理解、連携不足
⑦地域指導者と学校の先生方の理解不足
⑧公益性、自主運営に対する意識

二つ目の(2)**財源や施設、行政関係**での中味としては

①財源確保の問題
②クラブハウスなどの施設機能の整備
③活動拠点と多機能施設の整備
④会費に見合うメリットがない反応
⑤行政や体育指導員の理解・連携不足
⑥行政への依存度大・「行政に頼まれてやっている」という意識

今回の現地での研修はケルン体育大学リットナー教授をはじめ各専門分野における中心的な役割を果たしている方々の講義と4箇所のクラブ視察という日程であった。講義の中ではドイツのスポーツ振興の状況、スポーツと社会発展のかかわり、ドイツにおけるクラブマネジメントなどについて示唆に富むお話を拝聴いたしました。又、クラブ視察では、小さなクラブからスタートして住民・会員と共に育ってきたクラブや高齢者を主な対象としているクラブ、充実した施設を完備し多くの会員がスポーツを楽しんでいるクラブなどを見学しました。いずれも、さすが先進国と感嘆させられる内容でした。特に、クラブ視察の際には、活動を終えた後のクラブ員の皆さんと交流を深めることができ、改めてスポーツクラブの素晴しさを実感した次第です。

そして、今回の海外研修に於いて、私なりに理解を深めた事を踏まえ、是非これはやってやろうと思ったことを挙げてみます。

未来あるスポーツクラブづくりとして

①設立目的の明確化と再確認

①何を目指すのか！……どう変えるのか！
②5年後、10年後のグランドデザインは（どんな町にしたいのか！）
③事業目的は何か……誰の為に、何を、どの位やるのか

②事業の目標設定と評価方法の確認

①数値目標の設定
②外部評価の徹底

③関係機関や組織との連携

①行政機関（健康・福祉・介護）部門とのパートナーシップ
※ 県、市関係機関との事業連携、例えば、健康づくり関連事業の共有化や福祉部門と

連携した高齢者の健康づくりなど

②学校機関や企業との連携

※学校とクラブとの情報・ノウハウの交流、企業へのプログラムサービス

④クラブスタッフ、指導者の養成確保

①理想のクラブマネージャー化

・先が見抜ける　・ビジョンを持てる

・ひとを見抜ける　・組織が作れる

・責任を取れる

②スタッフの感覚（民間の経営感覚と行政のノウハウ）

③質の高い指導技術と人間的魅力

実技指導者（指導力・調整力）・中間指導者（気配り上手）

④情報発信・収集能力（住民はなにを求めているのか）

⑤既存のスポーツ団体との共生

①体育指導委員②体育協会③スポーツ少年団

④老人クラブ、他サークル

⑥財源の確保への戦略

①行政・民間助成団体の補助事業選択

②自治体との政策的協同（委託金）健康・体力づくり事業

③企業との相互支援体制の構築（協賛金）

④大学等とのコラボ事業の実施

以上の施策について、スポーツクラブを「我がまちのクラブ」として自分達で運営し、自分達で育てる考えを定着させる努力と共に、また、同じ思いを持った仲間を多く集め、できることから実践していきたい。

結び・スポーツクラブライフに「乾杯」そして「感謝」

スポーツクラブ先進国ドイツのスポーツシステムの理論と現状を短期間であったが、自分なりに充分に堪能し理解でき充実したものになった。特に、４つクラブを視察して、クラブ関係者の「やる気」「根気」まして、マネジメント手腕やそれをサポートされておられる方々の意識の高さに敬服するばかりであった。

現状の日本では、なかなか個人が地域の為に活動することの意識やその必要性が充分理解されにくいのが事実であろうと思う。今回の研修を活かして、更に豊かな方向性なり方策を見出し地域に根ざしたクラブを育成し、そしてより多くの人々がクラブライフを楽しめる社会を実現したい。

最後にこの度の有意義な研修の機会を与えて戴いた関係者の方々、お世話を戴いた先生方、そして一生涯の友「15人の仲間」に感謝申し上げます。

総合型地域スポーツクラブに「プロースト」（乾杯）!!

団員 辻 正彦

香川県高松市　香南ししまるスポーツクラブ
事務局書記

はじめに ～初めての渡欧～

何を隠そう私は海外に出るのが苦手である。仕事の関係で韓国に数回行った（行かざるを得なかった）経験があるだけだ。自ら進んで海外旅行など全く考えたこともない。だから私にとって今回の海外研修は大冒険であった。しかし、そんな田舎者の私をリラックスさせてくれたのは、言葉が通じなくてもドイツ式ボウリング（ケーゲル）で楽しませてくれたコルシェンブロイヒの方々であり、緑の芝生に囲まれたTUSグレーベンブロイヒのクラブハウスとそのスタッフであり、オルケン体操クラブが建てた体育館で体操を楽しむ少女たちの笑顔と、それを見守る役員の方々と飲んだアルトビールとキルピッチュ（リキュール）であった。

居心地のよいドイツのクラブ

もちろん、通訳の手を借りなければ意思疎通は困難なのだが、クラブハウスでメンバーの方々と一緒にいるだけで、その雰囲気の良さ、居心地の良さを私は感じることができた。それは、まるでレストランのようなクラブハウス、そこで一緒にいただくおいしい食事、そして地ビールという、まず日本のクラブではお目にかかれない要素も大いに影響しているわけだが、決してそれだけではない。出会った方々がたまたま良い人たちだった、というのとも違う。ドイツのクラブではそもそも、人と人との出会いや腹を割っての付き合いに重きを置いているのではないか、私にはそう思えた。自分の所属クラブを振り返るとどうだろうか。良いクラブだとは言えるが、初めての訪問者（ましてや外国人！）がその空間に足を踏み入れただけで、心が落ち着く、リラックスできる、何だか楽しそうだ、と思える雰囲気はあるだろうか。正直言って今の私には、胸を張って「ある」と言い切る自信はない。

当然のことではあるが、その背景にはドイツ人

の国民性が大きく関係している。ドイツ人は見知らぬ我々に対しても気軽にあいさつするし、会議中は数種類の飲み物、お菓子類が必ず出て、飲んだり食べたりしながら話し合う。しかし、そういった文化や風習の違いということとは別に、私が現地での各スポーツクラブの視察を通じて一番感じたのは、「クラブ」という概念が日本のそれとは異なっている、ということである。

ドイツ人にとってクラブとは交流

かつて、ベースボールと野球は違う、という内容の本が書かれたことがあったが、外国人が野球から受けた衝撃と、私がドイツのクラブを訪問して受けた日本のクラブとの違和感とはおそらく同じ種類のものだと思う。ドイツ人が「クラブ」（ドイツ語ではフェライン）という言葉から連想するイメージと、われわれ日本人が「クラブ」から想像するものとは、その中身が違うのだ。たとえ我々のような総合型地域スポーツクラブに携わる人間であったとしても、その認識の差は決して小さくないように思われる。というのも、私が感じたドイツの各スポーツクラブの印象を一言で表すと、「スポーツ」ではなく「交流」であるからだ。私の眼には、スポーツを目的に設立されたクラブでありながら、スポーツそのものよりも、会員同士の交流の方が重んじられているかのように感じられたのだ。（これについては単なるスポーツというカ

テゴリーを超え、近代ドイツ史における市民社会の形成について学ぶ必要があるかも知れない)。

この「交流」という要素については、総合型地域スポーツクラブ設立によるメリット、いわば副産物として語られる事が多く、「交流」それ自体がクラブの存在理由である、とまで主張される事は無かったように思われる。ただ、総合型地域スポーツクラブというネーミングの「地域」に焦点を当てたとき、現代の日本が抱えている少子高齢化や家庭崩壊、地域コミュニティの脆弱化や限界集落など、ある種の社会問題を解決する可能性が、この「交流」とは切っても切れない関係の「クラブ」にあることを、今回の研修を通して私は改めて気づかされた。

社会性をもった新しい集団としてのクラブ

かの地の社会学者テンニースは、人間社会が血縁・地縁などによって自然発生的に形成した家族や村落などの社会集団「ゲマインシャフト」(共同社会)から、特定の目的や利害関係によって形成された企業や都市や国家などの社会集団「ゲゼルシャフト」(利益社会)へと変遷していくと考えた。事実、21世紀に突入した現代、家庭という血縁関係や地域社会という関係性はその姿を変えつつある。しかしその一方で、利益中心の社会集団にしても絶対的な集団とはなり得ず、構成員の帰属意識は弱まっている。そもそも人間のより豊かなくらしのためにゲマインシャフトやゲゼルシャフトが形成されてきたはずが、今やどの単位の集団にも将来的な破綻の可能性をだれもが感じており、家庭や地域、学校や会社はもちろん、地方公共団体や国家という巨大な存在でさえも、先の見えない不透明さに包まれている。

しかし、この閉塞状況にあるとも言えるそれぞれの社会集団の良い部分、つまり濃密な人間関係を保持しつつも個々の自立と尊重を旨とし、公益という目的達成のために互いに協力して問題を解決していく、そのような特性を持った新しい社会集団が「クラブ」なのではないだろうか。

同好の士が集団を形成し、自分たちを律し、自己を満足させると共に地域にも有用な活動を受益者負担で行い、そこには会員同士はもちろん地域との交流も生まれ、行政や体育協会がそれらをサポートする。そのようにして誕生したドイツの「クラブ」は、社会性を持った集団であり、社会的存在であり、社会そのものである。だからこそ、ケルンスポーツ大学のリットナー教授は、「地域における重要な『社会資本』」と評価していた。

クラブから生まれるドイツ人の強い誇り

ドイツにおけるスポーツクラブの役割は、単なるスポーツの場の提供に留まらない。それは、「ゆりかごから墓場まで」の全世代の会員の社会性を維持し、地域の交流が生まれるための核となることである。「クラブ」によって子どもは社会を学び、大人は地域を大切にし、お年寄りは孤独とは無縁になる。そんな「交流」を大切にするドイツのクラブには、自立心とボランティア精神とが満ちており、また、そこから生まれる強い誇りを感じた。

それに対し、トップダウンによって始まったわが国の総合型地域スポーツクラブが本当に地域に根ざし、会員はもちろん地域住民もその存在に誇りを持ち、ドイツのような隆盛を見るためには、何よりまず理念の浸透が不可欠である。それがクラブ自らのものとなった時、クラブは国家の一施策という枠組みを超えた本物の「クラブ」となって、その存在は人々の意識を変え、学校や役所、病院などと同様に、地域にとって無くてはならないインフラとなり、世代を超えて存続していくはずである。

私たち派遣団員は、自分の所属クラブはもちろん、日本の総合型地域スポーツクラブをそのような「クラブ」へと導く責任を負っている。

団　員　石橋　紀公子

大分県大分市　川添なのはなクラブ
運営委員

ドイツでみつけた クラブ作りの為のキーワード

事前研修資料で、多少の予備知識を入れてはいたが充分把握出来ぬまま研修は始まってしまった。当然の事のように現地では言葉の壁が立ちはだかる、そこは多田さん、井手君という強力な援護を受け、同行した仲間と共に講義・視察と立て続けに新たな情報を聞き、書き止め、目に焼き付ける、という強行スケジュールの内に瞬く間にドイツでの一週間は過ぎてしまった。さて、いったい私は何を見て、何を学んで来たのだろうか、目にした情報と符合する予備知識をパズルのように組み合わせながら、まずは机上に文字にして書き出してみた。現在のドイツの社会的背景、ドイツスポーツクラブの起源、歴史、そして私が生活する地元の実情とも照らし合わせながら、研修がもたらした豊かな恵みをあらためてかみしめてみた。目にした情報と言えば、まずクラブハウスの設備の良さ、広いグラウンドや体育館、温水プールやトレーニング室、託児所まで備わったクラブもあったが、あれはすべて夢の中の出来事だったのではないだろうか、しかし自分の足であの地を踏み、カメラに収め、会話を交わした事は紛れない事実なのである。いつの日か私たちの町でも、だれでも気軽に立ち寄り、仲間と汗を流し，お茶を飲み談笑し合える憩いの場所が持てるのだろうか、地域のオアシスを実現する為に、いったい私達は何が出来るだろうか、今後の手がかりをまとめるために、研修の足取りを辿り、何度も繰り返してメモや資料を読みかえしてみた。

最初の講義では社会の発展と照らしてドイツのスポーツとスポーツクラブについて学んだ。健康で活気ある社会を作るために、経済発展のために福祉社会を支えるために、スポーツが持っている力を生かす必要がある。「スポーツは現代社会において必要不可欠な存在だ、ネットワーク構築は最も重要なテーマである」というケルンスポーツ大学リットナー先生の言葉は強いインパクトがあった。このスタート時からドイツにおけるスポーツの視点はさすがにハイレベルだと感じた。続いてのライン・ノイス郡スポーツ相談課アクセル・ベッカー氏による講義は、現場の実践を踏まえた内容で今回の研修の核心的な部分を占めていたと思う。ベッカー氏は研修のほとんどの日程に同行され、健康志向コースについての講義や視察先での説明、補足も担当された。「本来行政がするはずのスポーツの普及・振興や健康増進をクラブがしてくれるのだから行政がそれを補完するのは当たり前」と言われ、またボランティアの重要性を説き、多くのクラブ作りのヒントを下さった。移動や食事の合間にも些細な質問に気軽に応じて下さったベッカー氏の一言一言は私達を元気にしてくれる力があった。

現地に出向き担当者から直接伺った講義や視察では、クラブがいかに地域に貢献し、社会と繋がって来たのか、見聞きする事が出来た。実際に交流し、食事を共にしたオルケン体操クラブとシニア世代クラブは特に印象が強かった。どちらのクラブにも体育館やグラウンド、そして人々が集い夢を語る場としてのクラブハウスがあった。厨房やビールサーバーを備えたカウンターがあり、テ

ーブルや椅子が並べられ、自分たちが築き上げたクラブを誇らしげに自慢する役員の方々の豊かな笑顔があった。クラブハウスは立派な体育館やプールよりも私にとっては憧れを感じた場所だった。

子供の体力向上やタレント発掘に成果を上げているTSVバイヤー ドルマーゲンは、企業や学校と連携した様々なプログラムを持っており，日本のクラブ育成の手本となるアイディアがいくつも盛り込まれていた。「子ども達が将来どういった道に進んでも、一人前の大人として立派に社会に通用するよう配慮している」との自信に満ちた説明は今でも私の耳に焼き付いている。

ところで、この研修に参加する前まで私は、日本ではクラブ運営にボランティアを生かす考え方はなかなか難しいと考えていた。しかし研修が進むにつれ案外日本に馴染みやすい形態かもしれないと考えが変わっていった。クラブ視察の途中でふと思い当たることがあった。そういえば日本でも似たようなご近所付き合いがあったではないか。向こう３軒両隣とか、自治会では老人会や婦人会や青年団、行事の時の炊き出し等は今でも健在である。このように考えると、そんな古き良き時代からの地域の寄り合いがドイツのスポーツクラブと重なって見えて来た。規模も方法も異なるが、健康づくりや地域のコミュニティーを作る視点は同じではないか、と考え直すに至った。ボランティアを美しい心根を持つ特別な奉仕者がするものと断定して考えるのではなく、もっと気軽に、ご近所で今までのように少し出しゃばりやおせっかいな人達が引っ張る気のいい集団こそドイツにもいたあのボランティアさん達ではないか。そして「とにかくワイワイガヤガヤとやりましょう」くらいの勢いで出来る事が新しいシステムの中でも沢山あるような気がしてきた。

私が住むここ川添には「川添なのはなクラブ」がすでに産声を上げている。地域住民の全戸が会員となって発足した。従来からスポーツを核に地域づくりをして来た歴史があるからこそ、自然な形で新しいシステムに移行する事が可能だった。ドイツが実践するような、地域づくりにスポーツが持っている力を生かす視点は生きている。ところが住民の意識は「わが町の川添なのはなクラブ」についてどこまで思いを寄せているのだろうか。この新しいシステムにはまだ住民の意識がついて来ていないと、この頃私は感じていた。自治会、公民館、学校、スポーツや文化サークルなど様々な団体が起動している中で全く新しいシステムを作ったのではなく、あらゆる団体を繋ぎ更に骨太で頼りがいのある組織を目指して「総合型地域スポーツクラブ」として仕立て直したのである。このシステムは高齢化した地域に安心をもたらし、子ども達に夢を与え、住民に活気を呼び込むものであると認証されるにはまだ至っていない。住民の意識をしっかり巻き込む取り組みは最優先課題と考える。既存団体との連携を今まで以上密にする努力も必要だ。ドイツ研修でたびたび聞いた「クラブは変動する環境に対応する能力を高めなければならない」という言葉も忘れてはならない。既存のスポーツ団体に近寄り難い感覚を持っている人達に対しても魅力あるプログラムを提供しよう。

柔軟さと身近さを持って、多くの人々が求める「健康づくり」というキーポイントを添えて、たくましくて居心地の良い地域のよりどころをみんなで築き上げて行くのである。この総合型地域スポーツクラブという新しいしくみには地域の為の多くの財産が含まれる事を今こそしっかり伝える必要があると私は感じている。

今回の研修で学び得て来た事は私達が前に踏み出す為の追い風になった事は間違いない。同行した仲間と共に、見つけたものは、新たなライフシステムを産み出す為の心意気や人々が力を合わせることの真の意味であったと思う。

団　員　井上　聖子

宮崎県宮崎市　佐土原スポーツクラブ
理事長・クラブマネジャー

1　ドイツ研修に参加した動機

憧れのドイツをいつか必ず訪れ、いろいろなクラブの存在をこの目で確かめたいと、総合型地域スポーツクラブにかかわり始めた５年程前から思っていた。その願いがこんなに早く、しかも日本中から熱き思いを持って集まった14人の仲間と共に研修という形で叶うなんて夢のようであった。この事業を企画・実施してくださった関係諸機関と送り出してくださったクラブの役員・会員さんに深く感謝したい。

100年以上の歴史があり、現在もなお人々の間で育まれ成長を続けているドイツのクラブは、どのような人々によって作られ、どのように発展してきたのか、そして、現在の状況と未来の展望はどのようなものかそれを知りたいと思って研修に臨んだ。また、日本の現状を鑑みて、ドイツから学ぶべき点と日本独自のものを作り上げていくためのヒントを得て、今後のクラブ運営に生かすと共に、総合型地域スポーツクラブに関わる人々のために自分なりに貢献できることを模索することを課題としドイツ研修に参加した。

2　ドイツ研修を受けて わかったこと・感じたこと

私自身が想像していたことと実際のドイツの実情に大きな違いがあったものについて列記して感想を述べてみたいと思う。

(1) クラブの成り立ちについて

予想…ドイツが国家をあげて規律と体力づくりのためにスポーツを推奨し、行政主導でクラブを住民に作らせた。

実際…住民が、自主的にスポーツをやりたいという思いでクラブを作った。行政は、できた後のクラブをサポートするというスタンス。

(2) クラブに対する助成金

予想…行政がふんだんにクラブに対して助成金を出している。

実際…行政は、クラブの規模や運営状況に応じて補助金を出している。

(3) クラブにおける運営ボランティア

予想…国または地方自治体から人件費が出ていて、人的な不足はあまりない。

実際…ボランティアが基本であり、大規模クラブ以外には専従のマネジャーはあまりいない。人材確保が課題である。

(4) クラブの規模

予想…大規模クラブが多い。

実際…会員数1,001人以上の規模クラブは、わずか６％で、300人以下のクラブが73％をしめるなど、大多数は、小規模クラブある。

(5) スポーツを行う場合の組織形態

予想…スポーツクラブでスポーツをする人が大多数。

実際…６割の人は、自分でまたは友人知人とスポーツすると答えている。

(6) 企業とのタイアップ（TSV バイヤードルマーゲンの場合）

予想…企業が積極的にスポンサーになりクラブを支援している。

実際…小さかったクラブが、コツコツと実績を重ねて企業に働きかけた結果、現在のようにスポンサーとしてバックアップしてくれるようになった。

ドイツのスポーツクラブの施設は、予想通り、いや予想以上に素晴らしかった。どのクラブも施設・プログラムが充実していて、日本との格差にため息が出るほどだった。

私が、一番意外に思ったのは、ドイツのクラブが、国家的戦略で生まれたのではなく、あくまでも住民主導で「スポーツをする権利を勝ち取るため」に、住民側が働きかけてクラブを作ったという点である。行政は、クラブの実態を把握し、それに応じて補助金を出したり相談機関等を設置したりして援助しているということであった。

２の（６）に書いたTSVバイヤードルマーゲンのクラブマネジャーのアクセル・ヴェルツ氏が「我々は、日本からの研修団を多く迎え入れているが、当クラブを視察したことを日本に持ち帰り、どのように生かしているかが伝わってこないことが残念だ。」と言われたことに対して、私が（以前どういう団体が視察に来たか知らないのに、代理で言い訳をするように）「それは、あまりにもこのクラブが立派すぎて自分たちには到底このような環境はできないと感じたせいではないでしょうか？」と発言した言葉に対してのアクセル・ヴェルツ氏の返事が、クラブの在り方のすべてを物語っていると感じた。

その言葉とは、「今、あなたが言った意見を私は到底受け入れられない。なぜなら、このクラブも最初はとても小さくて、少しずつ実績を積み重ね、合併したり企業に対して援助を申し入れたりしながら、何十年もかけてここまできたのです。」というものであった。私は、バイヤー社がスポンサーになっているそのクラブの施設の壮大さと充実ぶりを見て、ある意味、あまりにも偉大すぎて真似できないと無力感を感じていたので、その話はとても新鮮で驚きだった。と同時に、日本の小さいクラブでも、大きく成長するためにコツコツと努力し、企業や自治体に対して様々な提案をするなど積極的に働きかけをすれば、理想的な環境を手にいれることは不可能ではないと感じた。勇気を与えてくださったアクセル・ヴェルツ氏に１日も早く良い報告ができるように努力したいと思う。

3 日本の総合型地域スポーツクラブが発展するために

ケルンスポーツ大学のフォルカー・リットナー先生の講義の中で、私が印象に残ったのは「スポーツも市を必要とし、市もスポーツを必要とする」という部分であった。クラブは、行政との対等なパートナーシップを築き、公共の役割を十分果たした上で、様々な支援を要請していくことが大切であるということを学んだ。

私たちは、外国のクラブを参考にしながらも日本の風土や地域の実情に合ったクラブをつくり運営していく必要がある。私は、日本中のクラブが、人々に愛されながら100年後も200年後も発展しながら活躍していることを夢見てやまない。

4 クラブマネジャーとして

私は、佐土原スポーツクラブの設立準備段階から現在まで５年間クラブマネジャーとしてクラブに関わってきた。総合型地域スポーツクラブの存在そのものを問われる時に決まってこう答えてきた。「クラブは、ないよりは絶対にあったほうがいいと思う」と。

クラブの存在が地域に浸透してくると、いろいろな相談や依頼があちこちから舞い込んでくるようになり、スポーツの持つ魅力をますます感じている今日この頃である。

今回のドイツ視察をきっかけに全国で頑張っている同士たちの活躍も知ることができ、モチベーションの向上につながった。今後も全国のクラブ関係者と情報交換をしながら、役員・会員・地域のみなさんと力を合わせクラブとしてやるべきことをコツコツと実践し、更なる発展を目指して一歩ずつ前進していきたいと思う。

派遣事務報告

派遣事務報告

派遣団総務：金谷　英信（日本体育協会クラブ育成課）

出発まで

1 派遣期日・スケジュールの決定

本事業受入先であるドイツ連邦共和国ノルトライン・ヴェストファーレン州ライン・ノイス郡スポーツ相談課アクセル・ベッカー氏との調整により、派遣期日を10月27日（火）から11月２日（月）までと決定した。

また、ベッカー氏に現地スポーツクラブや講師との調整を依頼し、研修プログラムの内容（講義・クラブ視察）を決定していった。

渡航業者については、業者選定の上、㈱ＪＴＢ法人東京に依頼することとなった。

2 派遣団員の募集と決定

本事業はスポーツ振興くじ助成金を申請し、４月17日付にて内定通知があった。その後、平成21年度日本体育協会公認クラブマネジメント指導者海外研修事業実施要項を定め、５月13日付、都道府県体育協会宛て文書をもって派遣団員の推薦依頼を行った。

派遣団員の人選については、６月５日（金）の応募締め切りまでに、16県体育協会より24名の推薦があり、６月15日（月）に開催した選考委員会において、①本会公認マネジメント資格の有資格者であること、②ブロック別のバランス、③活動状況等を考慮の上選考を行い、同日開催の生涯スポーツ推進専門委員会において、12名の団員が内定した。また不測の事態に対応するため３名を補欠内定者とした。後日、事前研修会に全員が参加したことにより12名を正式団員として決定した。

また、団長を本会生涯スポーツ推進専門委員会委員で総合型地域スポーツクラブ全国協議会幹事長の小倉　弐郎氏に、副団長を同じく生涯スポーツ推進専門委員会委員で福島県文化スポーツ局スポーツ課長の国井　裕一氏に決定したが、国井氏が公務の都合により参加できなくなったため、福島県体育協会事務局長の橘　和彦氏に副団長として参加いただくこととなった。

総務については、本会事務局生涯スポーツ推進部クラブ育成課係長の金谷英信がその任にあたることとなり、15名の派遣団が編成された。

3 事前研修会の開催

派遣団の事前研修会は、９月４日（金）・５日（土）の１泊２日の日程で、岸記念体育会館理事・監事室において開催した。講師には、ドイツのスポーツ事情に見識をお持ちの本会総合型地域スポーツクラブ育成委員会委員、中央企画班長で福島大学教授の黒須充氏と千葉県総合スポーツセンター、前福島県クラブ育成アドバイザーの川瀬周平

事前研修会日程表

時間	第１日目(9/4・金)	第２日目(9/5・土)	時間
9:00			9:00
10:00		講義 ドイツのスポーツクラブについて 講師：川瀬　周平氏 （千葉県総合スポーツセンター指定管理者事業運営担当／前福島県クラブ育成アドバイザー）	
11:00		派遣団共通確認事項打合せ	11:00
12:00		解　散	12:00
13:15	集合・受付		
13:30	開会・あいさつ オリエンテーション		
14:10	海外研修事業について		
14:40	講義 ドイツのスポーツ振興について 講師：黒須　充氏 （福島大学／中央企画班長）		
16:40	休　憩		
17:00	渡航に関する手続き等について		
18:00			

氏にドイツのスポーツ振興およびスポーツクラブについて講義いただき、また、現地における研修内容についてアドバイスをいただいた。

また、報告書の掲載内容の協議や渡航に係る手続きや携行品の確認等を行った。

4 派遣団最終打合せ・結団式

出発前日の10月26日（月）15時より最終打合せを岸記念体育会館理事・監事室にて開催した。最終打合せでは、スケジュール、研修プログラム、団員の役割分担、渡航手続き、携行物品等の確認を行った。

17時より、同じく理事・監事室にて結団式を行い、本会岡崎助一専務理事のあいさつ、小倉弐郎団長をはじめ、各団員の決意表明等により進行した。

5 現地での行動記録

10月27日（火）から11月1日（日）の6日間、団員が交代で日々の行動を日誌にまとめている。行動日誌をもとに現地での行動記録を報告する。

●10月27日（火）Hotel Sonderfeld泊　晴れ（成田）／曇り（グレーベンブロイヒ）

ホリデイ・イン東武成田ホテルに前泊、7：30ホテルロビーに集合。団員の荷物を積み込み、7：40ホテルを出発。7：50成田国際空港第一旅客ターミナルに到着し、JTBのカウンターにて搭乗手続きの説明があり、本会クラブ育成課根本課長に見送られ、10：40LH711便にて出発。席はほぼ満席であり、インフルエンザ予防でマスクをしている方が多かった。揺れも少なく快適な空の旅であった。現地時間14：00に経由地のフランクフルト国際空港に到着した。乗り継ぎまでの時間を空港内散策、写真撮影、コーヒータイムと各自で過ごし、16：30LH808便にてデュッセルドルフ国際空港に向けて出発した。17：15に到着し、荷物を受け取った後、受入を担当いただいたライン・ノイス郡スポーツ相談課のアクセル・ベッカー氏と通訳の井手鉄矢氏の出迎えを受け、バスにて宿泊先であるグレーベンブロイヒのHotel Sonderfeldへ向かった。18：20にホテルに到着し、チェックイン

乗り継ぎのフランクフルト国際空港で記念撮影

を済ませ、19：30から、ホテル近くのレストランHaus Portzにてベッカー氏、井手氏を交えたミーティング、夕食会を行った。団員が楽しみにしていたビールで乾杯を行い、ボリュームある食事をおいしくいただいた。ここまでの移動時間と時差により、団員のほとんどが睡魔に襲われていたが、23：00無事ホテルまでたどり着いた。

研修の成功を祈って乾杯

●10月28日（水）Hotel Sonderfeld泊　晴れ（グレーベンブロイヒ）

【訪問先】 ライン・ノイス郡庁舎、コルシェンブロイヒ市スポーツ課事務所、コルシェンブロイヒシニア世代スポーツクラブ

本日より、研修がスタート。8：30にホテルを出発、徒歩10分程度で講義会場に着いた。講義会場までの街並みの雰囲気を味わいながらの移動となった。

初日ということもあって、皆さん少し緊張気味の面持ちで、最初の講義に臨んだ。

9：00ケルンスポーツ大学スポーツ社会学主任教授のフォルカー・リットナー氏より「社会の発展とスポーツ」をテーマに講義いただいた。

その後、当初は講義前にあいさついただくことになっていたが、公務の都合で、講義中にライン・ノイス郡スポーツ局長のユルゲン・スタインメッツ氏の歓迎を受け、記念品の交換と記念撮影を行った。

ユルゲン・スタインメッツ氏（中央）、リットナー教授（左）

続いて、ベッカー氏に「ライン・ノイス郡のスポーツ」と題し、ドイツのスポーツシステム、ライン・ノイス郡のスポーツとスポーツ振興について講義いただいた。

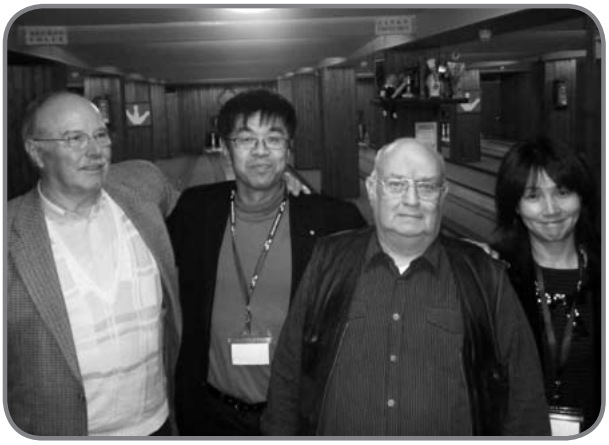
12：10より近くのショッピングセンターのカフェで、打合せを兼ねて昼食を取った。

13：05にコルシェンブロイヒへバスで移動し、13：40にコルシェンブロイヒ市スポーツ課長のハンス・ペータ・バルター氏より「自治体のスポーツ振興」と題し、行政からのスポーツクラブに対する支援について講義いただいた。講義を受けたコルシェンブロイヒ市スポーツ課事務所は、元はビール工場となっていた場所で、とても趣がある建物であった。

元ビール工場の事務所で講義を受ける

15：00に視察先のコルシェンブロイヒシニア世代スポーツクラブへバスで移動し、クラブの活動場所において、クラブ活動の説明・参加体験と理事との懇親を行った。

その後、近隣の体育館へ移動し、17：30よりクラブ役員とのケーゲル（ドイツボーリング）体験と懇親会を行った。クラブ役員との交流で、初日の緊張が解け、楽しい時間を過ごすことができた。20：40ホテル着



クラブ役員とケーゲルを楽しむ

●10月29日（木）Hotel Sonderfeld泊
雨のち曇り（グレーベンブロイヒ）

【訪問先】ライン・ノイス郡庁舎、TUSグレーベンブロイヒ、オルケン体操クラブ

8：30昨日と同様、徒歩で講義会場へ向かった。昨日の会場と別の会議室での研修となった。本日より、福島大学教授の黒須充氏が研修事業に合流した。9：00より講義が始まり、まず、ベッカー氏より、昨日の講義で触れられなかった部分の説明があり、続いて、「スポーツクラブの健康志向コースについて」と題し、最近のスポーツクラブの動向として健康志向のプログラムの内容について講義された。11：35より続いて、ベッカー氏の同僚のマーティン・リンバッハ氏より「クラブマネジメント」と題し、ドイツで行われているクラブマネジャー講習会の内容、システムについて講義があった。

12：50より小グループに分かれ昼食をとりながら打合せを行った。

昼食後、13：50より、ヤン・カペレン体操クラブ会長のヴィンフリート・シュミット氏より、クラブ運営の実際について、講義いただいた。

15:00次の視察クラブまで、徒歩で移動し、TUSグレーベンブロイヒのクラブハウスやクラブ専用のグラウンド、陸上トラック等の施設見学とクラブの活動等について説明いただいた。

クラブハウスには、交流スペースにクラブのシンボルマーク、他のクラブとの交流した証であるペナント・写真、大会トロフィー、バーカウンターがあり、日本で思い描いていたクラブハウスのイメージどおりであった。

16：45ホテルへいったん戻り、ホテル近くにあるオルケン体操クラブの視察を行った。子どものサッカーや小中学生体操、サーキットトレーニング等のプログラムを視察し、会長のハインツ・ペータ・コルテ氏、副会長のハンツ・ユルゲン・シュミット氏他、クラブ役員との懇親夕食会により交流を深めた。23：00ホテル着

オルケン体操クラブにて

●10月30日（金）Hotel Sonderfeld泊　晴（グレーベンブロイヒ）

【訪問先】TSVバイヤードルマーゲン、ノルベルト・ギジナジウム

製薬会社のBayerがスポンサーとなっているTSVバイヤードルマーゲンのクラブを視察した。広大な敷地に建てられた充実した施設をクラブマネジャーのアクセル・ヴェルツ氏、ハンス・ペータ・ケーニッヒ氏の案内で見学を行い、引き続き２人からの講義を受けた。その後、クラブのレストランでヴェルツ氏と談笑しながら昼食を取った。そのレストランには、同クラブ出身でフェンシング世界選手権金メダリストのニコラス・リンバッハ氏が昼食を取っており、記念撮影に応じてくれた。

昼食後、14：30より、クラブと連携してタレント発掘事業に参画しているノルベルト・ギジナジウムを訪問し、全寮制寄宿舎を見学した。リリー・ツァンダース氏より学校の概要を、事業担当者のクリスチャン・ヘンシェル氏よりタレント発掘事業について説明があった。16：15より、最終講義として、ベッカー氏により今回の研修の質疑応答・まとめがあった。

バスにてホテルに戻り、19：00よりホテル近隣の中華レストランにて派遣団主催により、答礼夕食会を行った。初日に講義いただいたケルンスポーツ大学教授のリットナー氏、ライン・ノイス郡スポーツ連盟のジークフリード・ヴィレケ氏、ベッカー氏、黒須氏、通訳の多田氏、井手氏に出席いただき、研修でお世話になった御礼を申し上げた。会の終盤、ベッカー氏より、研修をすべて修了したことを証明する修了証を団員一人ひとりに授与された。思いがけない配慮により、団員も喜んでいた。

夕食会終了後、ドイツ到着から、団に帯同され、研修のコーディネートをしていただいたベッカー氏とお別れとなり、団員それぞれが、感謝の意を伝え、別れを惜しんでいた。21：30ホテル着

研修修了証を持つベッカー氏

●10月31日（土）Renaissance Düsseldorf Hotel泊　晴（デュッセルドルフ／ケルン）

【訪問先】デュッセルドルフ、ケルン

帰国前日となり、別のホテルへ移動するため、9：30にホテルを出発した。講義の通訳をしていただいた多田氏とは、ここで別れた。講義での的確な通訳があったおかげで、より良い研修となったことを感謝申し上げた。

10：10にRenaissance Düsseldorf Hotelに到着し、ホテルに荷物を預け、デュッセルドルフを散策した。昨日までいたグレーベンブロイヒの街並みとは違った都会の雰囲気を味わうことができた。

黒須氏の案内により、12：27にケルン行きの鉄道に乗車、12：55にケルン中央駅に到着、駅近くにあり世界遺産で有名なケルン大聖堂を見学した。短い時間であったが、厳かな雰囲気と壮大な建築物の一旦を垣間見ることができた。

ケルンのショッピング街を抜け、ノイマルクト駅で市電に乗り、ケルンスポーツ大学のあるライン・エネルギエ・シュタディオン駅で下車し、現役大学院生である通訳の井手氏の案内で、ケルンスポーツ大学の施設を見学した。広大な敷地に、研究棟、学生寮、体育館、プール等の施設があり、時間の関係から、駆け足での見学となってしまったが、施設が充実していることが伺えた。

その後、大学の隣にあり、サッカーW杯ドイツ大会でも会場となったライン・エネルギエ・シュタディオンでサッカーブンデスリーガ「1.FCケルンVSハノーファー96」の試合を観戦した。

ここで、通訳の井手氏とお別れとなり、ドイツ到着後から団に帯同いただきお世話になった御礼を伝えた。

本場でのトップリーグの試合観戦は、クラブ関係者にとって、意義深いものとなった。クラブの熱狂的なサポーターを目の当たりにして、クラブの存在が地域住民にとってどれほど大きい存在であるかを実感することができた。

試合終了後の混雑を避け、終了前にスタジアムを出て、市電に乗り、ケルン中央駅を経由し、デュッセルドルフ駅に向かった。到着後、デュッセルドルフの日本食レストランにて研修団最後の食事をとり、22：40ホテル着。

ケルンスポーツ大学前にて

●11月1日（日）小雨（デュッセルドルフ）

帰国のため、8：00にJTB現地スタッフとともにホテルを出発し、デュッセルドルフ国際空港に到着、最近導入された自動チェックインシステムにより各自手続きを行った。パスポートが機械に読み込まれない方もいて、手続きに少し手間取った。ホテル出発前に荷物の重さをチェックしていたため、荷物預けの手続きはスムーズにできた。

10：35LH807便にて経由地のフランクフルト国際空港へ向かい、11：25に到着、出国審査を経て、日本への出発まで、各自買い物や昼食を済ませた。12：45搭乗口に集合し、13：35LH710便で成田国際空港に向け出発した。

●11月2日（月）曇（成田）

8：35成田国際空港到着。研修もおおむね予定とおりの日程を消化でき、まったくトラブルも無く、長時間の長旅であったが、無事元気に日本に帰国することができた。

小倉団長のあいさつがあり、解散。これをもってすべての日程が終了した。

Photo snap

10月26日

結団式にて

結団式での小倉団長の決意表明

10月28日

スタインメッツ氏・ベッカー氏・リットナー教授

講義

コルシェンブロイヒ市スポーツ課事務所

コルシェンブロイヒでの講義風景
(左が通訳の多田氏、中央がバルター氏、右がベッカー氏)

コルシェンブロイヒシニア世代スポーツクラブ活動場所

コルシェンブロイヒシニア世代スポーツクラブ
記念品贈呈

ケーゲル場

10月29日

ホテルでの朝食

グレーベンブロイヒの街中

講義風景

TUS グレーベンブロイヒ　クラブハウス

TUS グレーベンブロイヒ
壁いっぱいに飾られたペナント

オルケン体操クラブ　クラブ役員の皆さん

TUS グレーベンブロイヒ　サッカー場、陸上トラック

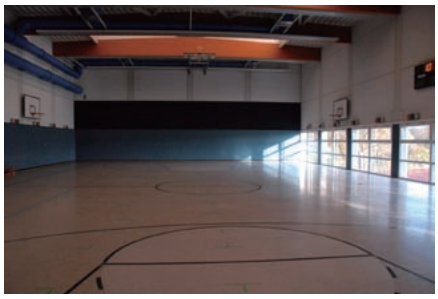
オルケン体操クラブ　指導者から説明を受ける

オルケン体操クラブ　幼児サッカー

10月30日

朝のミーティング

TSV ドルマーゲン　クラブ入り口にあるエンブレム


TSV ドルマーゲン　フェンシング場

TSV ドルマーゲン　グラウンド

TSV ドルマーゲン　レストランで昼食

ノルベルト・ギジナジウム

寄宿舎の中を見学

最終講義

答礼夕食会

10月31日

ケルン大聖堂

通訳井手氏の案内で大学内を見学

ライン・エネルギエ・シュタディオン

サッカー観戦

11月2日

帰国時　成田国際空港にて

平成21年度財団法人日本体育協会
クラブマネジメント指導者海外研修事業
報告書

発行日　平成22年3月31日
発　行　財団法人日本体育協会
〒150-8050
東京都渋谷区神南1-1-1
岸記念体育会館
TEL　03-3481-2278
印　刷　広研印刷株式会社

総合型地域スポーツクラブ

～創立 100 周年記念事業スローガン～

日本のスポーツ 100 周年　誇れる未来に　あらたな一歩

日本体育協会は平成 23 (2011) 年に創立 100 周年を迎えます